

中韓両国の歴史・文化摩擦に対する文明史的考察

金 光林

Consideration on the Historical and Cultural Conflict between China and South Korea

Gwang Lim KIM

平成20年(2008)10月
新潟産業大学人文学部紀要
第20号抜刷

中韓両国の歴史・文化摩擦に対する文明史的考察

金 光 林

I. はじめに

1992年に中国と韓国は外交関係が樹立されてから、両国間の経済関係が急速に深まり、人的交流も盛んになった。韓国では、中国ブームが巻き起こり、中国に対する期待感が高まった。

しかし、2004年に中国と北朝鮮がそれぞれ高句麗の遺跡を「世界文化遺産」として登録しようとしたことがきっかけとなり、高句麗史を中国の歴史と位置づける（中国内の少数民族の地域史としての位置づけ）中国の学界と中国政府の姿勢に韓国の世論が激しく反発し、この問題が中国と韓国政府の間の外交的問題へと発展した。2004年8月に中韓両国政府の間で高句麗史の問題を政治問題化しないなど5項目の「口頭了解」¹⁾が成立し、外交論争は一応沈静化した。高句麗史の帰属をめぐる中国と韓国・朝鮮の隔たりは依然存在し、この問題の根本的な解決にはまだ至っていない。

一方、2005年に韓国政府が地方の民俗祭りである「江陵端午祭」を「世界無形文化遺産」に登録したことがきっかけとなり、中国では、韓国が「端午祭」という中国の伝統文化遺産を奪ったという論調が広まり、印刷術、天文測定器、東洋の伝統医学をめぐる宗主権論争も相まって、中国では韓国が中国の伝統文化を侵食し、中国の歴史を歪曲しているという認識がインターネットを中心に広まるようになった。中国のこのような論調が韓国のメディアに大きく報道され、中国における「嫌韓論」として位置づけられている。

以上のように、2000年代に入り、中国と韓国の間では、経済面での急速な関係強化にもかかわらず、相互の歴史と文化の認識をめぐる摩擦が起こっているのも現状であ

1) ここでいう5項目の「口頭了解」とは、高句麗史問題が両国間の重大な懸案になったことに対する中国側の留意、歴史問題によって両国の友好協力関係が損傷を受けないように努力、高句麗史問題の公正な解決を図り、必要な措置によって政治問題化を防止、中国側は中央及び地方政府のレベルにおける高句麗史の記述に関する韓国側の関心に理解を示し、必要な措置によって問題の複雑化を防止、学術交流の早急な開催による解決などである。

る。

筆者はこのような摩擦は単に偶発的に発生しているものではなく、中国と韓国・朝鮮の間に両国の歴史と文化に対する共通の認識が十分に成立していないことが根本的な原因だと考えている。

そこで、本稿では、中韓両国の近年の歴史・文化摩擦の事例を具体的に分析しながら、この問題の発生の原因を多様な側面から探り、文明史的視点から中韓両国間の歴史と文化認識について考察したい。

Ⅱ. 高句麗史の帰属をめぐる韓国と中国の論争

1. 中国における高句麗史の帰属問題と「東北プロジェクト」

近代に入って、高句麗の「広開土王碑」に代表される金石文の研究が中国人の高句麗研究の先駆けであった。中国において、高句麗の研究が進むにつれて、一部の研究者から高句麗の歴史を中国史の延長線上で捉えるべきだという主張がなされたが、近・現代の中国歴史学界では高句麗の歴史を朝鮮史の一部と見なす見解が支配的であった。現在の中国政府も以上のような見解を支持したと見られ、62～63年には中国政府と北朝鮮政府が共同で中国内の高句麗・渤海遺跡を調査し、発掘遺跡の一部を北朝鮮に提供したと言われる。

1980年代に入ると、中国における高句麗史の研究がより積極的になると同時に高句麗史を中国史の一部と見なす見解が中国の研究者の間で増え始め、西暦427年に現在の中国境内の国内城から平壤へ遷都する以前までの高句麗史は中国史であり、平壤遷都以後の高句麗史は朝鮮の歴史であるという、いわゆる「一史両用」論が多くなされた。このように、中国で高句麗史研究が積極的に行われ、高句麗史を中国史の一部に編入する動きが出てきたのは、その直接なきっかけは79年から83年にかけて北朝鮮の社会科学院歴史研究所が『朝鮮全史』（全35巻）を発行したことにあると考えられる。

『朝鮮全史』の古代史の部分において、朝鮮史の主体性が強調され、朝鮮半島北部地域と中国東北地域に跨って建国された古朝鮮の存在、同じように朝鮮半島北部と中国東北地域に跨って建国され、隋・唐など中国王朝と堂々と争った高句麗と渤海の自主性などを特に強調したことに対する反発が中国の東北地域史研究者たちの間で広まり始めたと見られる。

朝鮮史の主体性を強調すると、中国からの独自性、時には対立関係を浮き彫りにする

ことになり、朝鮮民族の起源が現在の中国東北地域と密接な関係にあるために、朝鮮の古代史の領域が中国東北地域にまで及んでしまう。そのために、そもそも朝鮮古代史の叙述が中国との波乱要素を含むものである。

もう一つ、近年、中国において高句麗の研究が積極的に行われ、高句麗史を中国史に編入する動きが強まったのは韓国との関連もある。92年に中韓両国の国交が樹立されてから、韓国から大勢の研究者が高句麗の遺跡の研究・調査に中国東北地域を訪れ、中国内の高句麗遺跡を見学する韓国人も多く、韓国においても高句麗史に対する国民的関心が高い。その過程で一部の国粋主義的な韓国人たちが中国へ行き、高句麗・渤海の旧領土は韓国のものであるという主張をして中国側の警戒感を引き起こしたりした。こういうことによって、南北朝鮮が統一されたら高句麗・渤海を理由に中国に領土要求をするだろうという警戒感が中国の東北地域の歴史研究者、中国の辺境問題の研究者たちの間で起こり、そのために中国における高句麗史研究が盛んになり、高句麗史を中国史に編入する動きが強まった。

主に中国の東北地域（遼寧省・吉林省・黒龍江省）の研究者たちによって始まった高句麗史の研究は、1980・90年代を経過しながら、1,000篇を超える論文が発表されるほど研究が盛んになり、90年代中頃からこれまでの高句麗史を中国と朝鮮の両国がその歴史を共有するという、いわゆる「一史両用」論よりは高句麗史を全面的に中国史の一部と見なす見解が優勢になってきた。しかし、この問題がこの時点までは韓国・朝鮮と中国の研究者の間で論争されることはあっても、国家間の表立った歴史論争にまでは至らなかった。

この問題が水面に浮かび上がり、大きな論争になり始めたのは、2001年に北朝鮮が高句麗の壁画古墳をユネスコの「世界文化遺産」として登録申請をしてからである。1998年10月に世界遺産協約の加入国になった北朝鮮が国際記念物遺跡協議会（ICOMOS）と文字文化保存及び復元研究センター（ICCROM）の財政的、技術的支援を受けて、遺跡を整備した後、2001年に登録申請をした。

中国の研究者たちの間では、北朝鮮の高句麗壁画古墳の「世界文化遺産」の登録申請を政治的行為と批判する主張がなされ、中国政府も高句麗遺跡の「世界文化遺産」の登録を北朝鮮が単独で行うことを望まなかったようである。そこで、中国政府は2001年末に急遽文化部副部長を北朝鮮に送り、高句麗の遺跡を中国と北朝鮮が共同登録することを勧誘したが、北朝鮮によって拒否されたと言われている。その後、2003年6月30日から7月5日の間にパリで開かれた第27回世界遺産委員会（WHC）において、北朝鮮が登録申請した63基の高句麗壁画古墳が登録を1年間延期された。

延期の主な理由は国際記念物遺跡協議会（ICOMOS）が実施した報告書に、北朝鮮が高句麗古墳群に対して十分な資料を提供せず、文化財保護管理に問題点があるなどの問題が指摘されたためであるが、この報告書を中国人学者が作成したため、韓国の関連研究者の間では北朝鮮の高句麗壁画古墳が登録を延期されたのは中国の牽制があったためであるという推測が出ている。

この頃から、高句麗史の帰属問題は中国の重要な国家的政策課題となったと見られ、中国社会科学院と東北三省（遼寧省・吉林省・黒龍江省）政府の宣伝部門の後援を受けながら、中国社会科学院辺疆史地研究センターが中心となり、2002年2月から5年間の研究期間を設けて大量の人員と資金を投入したといわれる、「東北プロジェクト」という研究プロジェクトを立ち上げた。この「東北プロジェクト」は中国の東北地域の歴史全体と国境問題を巨視的に研究することを主旨とするが、韓国・朝鮮と歴史論争の素地のある古朝鮮・高句麗・渤海の研究が重要な研究課題に挙げられている。

この「東北プロジェクト」がスタートしてから、中国では東北地域の歴史研究者、辺境問題研究者を中心に古朝鮮・高句麗・渤海に対する研究が盛んになり、一種のブームの様相さえ帯びていた。2002年2月に「東北プロジェクト」がスタートから、中国では高句麗に関するシンポジウムが複数回も開かれ、同時に高句麗＝中国史という認識も広がっている。

一方、中国政府は2001年に行った北朝鮮との高句麗遺跡の「世界文化遺産」の共同登録要求が拒否されると、吉林省の集安と遼寧省の恒仁にある高句麗の首都と王陵・古墳を「世界文化遺産」暫定目録として提出し、2003年1月に「世界文化遺産」登録を正式に申請した。そして約半年くらいの時間をかけて吉林省の集安と遼寧省の恒仁にある高句麗遺跡を大規模に補修し、同年9月には国際記念物遺跡協議会の実地調査も受けた。そして2004の7月1日に中国江蘇省蘇州で開催された第28回世界遺産委員会で、北朝鮮と中国の両国がそれぞれ申請した自国内の高句麗遺跡が「世界文化遺産」として同時登録が認められた。

現在、中国の学界において高句麗史を中国史の一部と主張する主な論拠は次のようなものである。

- 1) 高句麗は中国の中原王朝の統治秩序の中で建国された。
- 2) 高句麗は独立国家ではなく、中国の中央王朝の地方政権である。
- 3) 高句麗民族は中国の古代の一民族である。
- 4) 隋・唐と高句麗の間の戦争は中国における国内戦争である。
- 5) 王氏高麗は高句麗を継承した国家ではない。

6) 朝鮮半島の北部地域も中国の歴史に属する。

2. 韓国・朝鮮における高句麗史の帰属問題と「東北プロジェクト」への反応

すでに935年に建国された高麗王朝が高句麗を継承するという明確な意思を持ち、そのために国名を「高麗」とし、高麗時代に編纂された『三国史記』『三国遺事』において、高句麗・新羅・百済を朝鮮古代の三国と規定し、以後の朝鮮の歴史書も以上のような記述を踏襲し、高句麗人が同時代の百済人・新羅人と同類意識を持ち、文化的にも百済・新羅と同質的性格が強いと思われたため、韓国・朝鮮においては高句麗史を朝鮮史の一部と見なすことに疑問を持つことはまずはなかった。1980年代頃から、中国の一部の高句麗研究者の間で高句麗史を中国史と公言することに反感を感じる韓国・朝鮮の研究者が多かったが、中国の「東北プロジェクト」がスタートするまでは、韓国・朝鮮で高句麗史の帰属問題をめぐって中国と公に論争することは少なかった。

2002年2月に中国の国策研究の性格の強い「東北プロジェクト」が正式にスタートし、「東北プロジェクト」の目的の一つが高句麗史の中国史編入にあると思われたため、韓国で強い反発が公然と起こった。韓国では2003年12月から2004年1月頃までにメディアに「東北プロジェクト」を通した高句麗史の中国史編入が大きくクローズアップされ、メディアによる反論・反発はもちろん、学界・市民団体・韓国政府のいずれからも反発の声が上がり、具体的な対応策が出ていた。

まず、韓国の学界の反応である。2003年11月19日に韓国古代史学会など複数の韓国歴史関連学会により「高句麗史歪曲共同対策委員会」が発足し、12月9日には韓国古代史学会・韓国考古学会・韓国近現代史学会・韓国歴史研究会などの17の韓国歴史関連学会が共同声明を発表して、中国が国策事業の「東北プロジェクト」を通して、高句麗史を中国史に編入することに抗議を示し、韓国政府にも外交通商部による中国政府に対する抗議と是正、教育人的資源部による「古代北東アジア研究センター」の成立、北朝鮮政府がユネスコに申請した高句麗古墳群の「世界文化遺産」の登録を韓国政府の文化観光部が支援することを要求した。

それから韓国の歴史学者たちが盛んに討論会・シンポジウムを開き、中国による高句麗史を中国史に編入する動きに対する批判と対策を検討し、韓国の古代史研究を強化することを主張していた。中国の「東北プロジェクト」を契機に韓国の学会においては高句麗史の研究がたいへん活性化され、2003年の年末頃から高句麗史関連研究書が多く出版されている。

韓国の市民団体の反発も激しかった。その反発の程度は日本の歴史認識に対する反発を超えるぐらいであった。韓国の学界と市民団体の中からは、中国の「東北プロジェクト」を単に高句麗史の中国史編入だけに目的があるわけではなく、古朝鮮・渤海をも中国史に編入させることによって、朝鮮古代史の中国東北地域との関連性を源泉的に断絶させ、韓国・朝鮮における中国東北地域に対する故土意識・縁故権を無くさせ、場合によっては現在の北朝鮮政権が崩壊した時の介入の名分をも作っているという主張も盛んに聞かれた。

韓国政府は、高句麗史の中国史編入が中国の一部の学者たちの主導によるものであり、中国政府の公式な見解であると見なし難いと判断し、最初は静かな解決を目指し、高句麗史の中国史編入の動きに対する憂慮を外交ルートを通して中国政府に伝達したが、中国政府と高句麗史帰属問題を外交問題にすることを避けていた。

2004年2月にソウルを訪問した中国外交部王毅副部長と韓国外交通商部の崔英鎮次官の協議により、両国間で高句麗史の帰属問題を政治的次元ではなく、学術的次元で解決することで合意した。同時に韓国政府は韓国の民間・学会レベルの高句麗史の研究を政府が積極的に支援することを決定し、同年の3月に高句麗史を中心に中国との論争の素地のある古朝鮮・渤海の歴史、古代から近代までの韓中関係史などを研究する高句麗研究財団を発足させ、政府関連機関の主催による高句麗史国際シンポジウムを積極的に開催し、学術交流を通して中国学界内の高句麗史に関する歪曲された見解を正すことにした。北朝鮮による高句麗遺跡の「世界文化遺産」登録を韓国政府も支援することにし、北朝鮮の高句麗の遺跡の保存・保護に韓国政府が資金・技術を提供することも表明していた。

ところが、2004年4月に中国外交部の公式ホームページから朝鮮半島の歴史から高句麗史が消えていたことが同年の7月頃に判明し、さらに7月1日に中国の蘇州で開かれていた第28回世界遺産委員会で北朝鮮と中国の高句麗遺跡がそれぞれ「世界文化遺産」として登録されてから新華社通信など中国の代表的メディアが高句麗を中国の地方政権と報道したことから、韓国の輿論が騒然となり、韓国政府も静かな解決策から正面突破を目指した。

それから韓国政府が数次に渡って中国政府に強い抗議を表明し、政府内に次官級の対策チームを設置し、韓国の与野党も様々な場で中国に抗議を表明した。

2004の7月から8月にかけて韓中両国政府の間で高句麗史の帰属問題をめぐって緊迫した神経戦が展開されたが、結局、問題の悪化を望まない両国政府の思惑もあり、8月に中国外国部の武大偉副部長がソウルを訪れ、韓国外国通商部の崔英鎮次官と長時

間にわたる協議を経て、高句麗史の帰属問題について、高句麗史問題が両国間の重大な懸案になったことに対する中国側の留意、歴史問題によって両国の友好協力関係が損傷を受けないように努力、高句麗史問題の公正な解決を図り、必要な措置によって政治問題化を防止、中国側は中央及び地方政府のレベルにおける高句麗史の記述に関する韓国側の関心に理解を示し、必要な措置によって問題の複雑化を防止、学術交流の早急な開催による解決などの5項目の口頭諒解に達成し、そのことによって韓中両国間の高句麗史帰属をめぐる外交論争を一応沈静化させた。この口頭諒解が達成された後は、両国政府の間で表立った論争は起こらず、韓国の輿論もそれ以上大きく問題にすることはなくなった。そして、両国政府の合意通り、2004年の12月に北京で韓国の高句麗研究財団と中国社会科学院共同主催の高句麗史非公開シンポジウムが開かれた。

しかし、2006年に入り、中国の遼寧省と吉林省の高句麗関連施設において、高句麗を中国の少数民族の地方政権と規定する説明がなされていることが韓国のメディアによって報道され、中国により高句麗史の歪曲が依然続いているという批判が韓国で再燃した。

韓国の盧 武鉉大統領が2006年の9月にフィンランドで開催された第6次ASEM大会中に行われた韓中首脳会談、続けて10月に中国で開催された韓中首脳会談で、高句麗史の中国史編入問題について遺憾を表明し、是正を求めたことに対して、中国の首脳から高句麗史の帰属問題をめぐって2004年に交わされた中韓両国の5項目の口頭諒解を実行し、問題が拡大されないよう行政的措置を取る意思が表明されたという。

中国政府は高句麗史の帰属問題をめぐる中韓の論争が拡大することを望まず、研究機関と東北の地方政府に高句麗史の帰属問題の外交紛争化を避けるように指示を出したと見られる。

それ以降、韓国では中国による高句麗史の編入の問題が大きく報道されなくなり、韓国政府は現在、中国政府が第2の「東北プロジェクト」を推進せず、高句麗史に関する研究成果を政策として公式に採用しない限り、この問題を静かに解決する姿勢を取っている。特に中国の教科書に「東北プロジェクト」の研究成果が反映されることを一種の禁止線として見なしているようである。

幸いなことは、中国でインターネットを中心に高句麗史は中国史だという世論が形成され、韓国の世論と正面からぶつかり合っていないことである。現在までのところ、高句麗史が中国史という主張は、中国の一部の学界と関連機関の領域に止まり、中国人に広く浸透した認識にはなっていない。

「東北プロジェクト」を通した中国の高句麗史の中国史編入について、北朝鮮からの公式的な反応はほとんど伝えられていない。中国との外交関係を考慮してメディアなど

による反論は行っていないようである。しかし、2004年3月26日・27日に韓国のソウルで中国の高句麗史歪曲対策委員会の主催による「高句麗の歴史と文化遺産」という国際学術シンポジウムにおいて発表された北朝鮮学者の論文内容を見ると、北朝鮮の学界が中国の高句麗史の中国史編入を容認しているとは思えない。2005年2月にロシアのウラジホトスクで韓国の高句麗財団と北朝鮮の社会科学院が共同主催した高句麗史シンポジウムで北朝鮮の発表者が高句麗史と渤海史を朝鮮史から分離させる動きを正面から批判した。高句麗史をめぐる論争がきっかけとなり、韓国と北朝鮮の高句麗史に対する連携の動きが強まっている。

2004年7月1日に中国の蘇州で開かれていた第28回世界遺産委員会では北朝鮮と中国の高句麗遺跡をそれぞれ「世界文化遺産」として登録することを決定した。この会議において、北朝鮮と中国の政府代表は相互に相手の領土内にある高句麗遺跡の「世界文化遺産」登録を支持したと伝えられている。両国政府とも高句麗遺跡の「世界文化遺産」登録を優先し、高句麗の帰属問題の外交問題化は避けたと見られる。

3. 高句麗史の帰属をめぐる論争の歴史的要因

韓国と中国の間で、高句麗史の帰属をめぐる論争が発生したのは、高句麗史の性格その問題に歴史的要因がある。

高句麗人は同時代の朝鮮半島の百濟人・新羅人と同類意識が強く、民族学的にも基本的に同じ民族であると言えるが、高句麗王国は東アジアの古代強国であり、高句麗人が主体でありながら、複数の民族、または種族から構成され、必ずしも単一民族の国家ではなかった。

668年に高句麗が唐と新羅の連合軍によって滅ぼされた後、高句麗の領土の大半を唐が支配し、一部を新羅が支配した。高句麗の住民の一部は唐によって中国内地へ強制移住され、一部は新羅に吸収されたが、それでも多くの住民が旧領土内に残ったと見られる。その後、高句麗の旧領土には渤海・遼・金など北方の遊牧・狩猟民族による王朝の盛衰が続き、高句麗人は以上の諸王朝に分散・吸収されていった。そうすると、民族的には必ずしも朝鮮民族だけが高句麗を継承したわけではなく、高句麗の旧領土も現在の中国と朝鮮・韓国に分かれている実情である。

高句麗の滅亡30年後に高句麗の故地に建国された渤海国も建国当初、日本に外交使節を派遣した際、高句麗の継承国として「高麗」と名乗ったことがある。

歴史的にも、高句麗史の帰属をめぐる論争が存在した。遼が高句麗の旧領土の大半を

実効支配していたことから、993年に高句麗の継承国を自称し、高麗に侵入し、高麗が支配する旧高句麗の領土を要求。高麗は外交論争を通し、高句麗の継承国であることを証明し、侵入を中止させた経緯がある。

4. 東アジアの史書における高句麗の帰属問題

中国の史書には、『後漢書』から高句麗に関する記録が登場し、以後、『新唐書』まで高句麗を「東夷伝」の中で記述した。『宋史』以後の中国の史書には、「外国列伝」の中で高句麗を記述した。以上のように中国の史書においては、漢代から唐代までは高句麗を「東夷伝」の中に位置付けて、中国王朝と明確に区別し、『宋書』以後からは高句麗を完全に外国として認識していた。

朝鮮の史書には、高麗時代の『三国史記』『三国遺事』から始まり、その後のすべての史書に高句麗を自国の歴史として位置付けた。『三国史記』『三国遺事』に高句麗を自国の歴史として位置付けたのは、高麗の太祖王建が高麗を高句麗の継承国と見なし、そこから国名を高麗にしたことと直接な関係があると見られ、高麗時代の史家たちには高句麗に対する同族意識が強かったと考えられる。事実、高句麗の滅亡後、同族である新羅・高麗はその旧領土の一部しか継承せず、高句麗人も唐・新羅・渤海・遼・金などに分散・吸収された。血統論からすれば必ずしも新羅・高麗だけが高句麗民族を継承したわけではない。高句麗の旧領土の場合も同じである。しかし、高句麗との同族意識を後世に高麗が最も鮮明に持ち、高句麗史を精神的に継承したのも朝鮮民族の国家である。

日本の史書には『古事記』『日本書紀』から高句麗の記述が登場し、高句麗を新羅・百済と同類の「三韓」として位置付けた。以後の日本の史書においてはこの伝統が継承され、近代に入ってから日本の学界では高句麗を朝鮮の古代史と見なすことに異論はほとんどなかった。

高句麗史の帰属問題が複雑な性格を持っていたとしても、以上のように朝鮮の史書だけではなく、中国の史書では『宋書』以降から完全に外国として認識し、日本ではすでに『古事記』『日本書紀』において高句麗を新羅・百済と同類の「三韓」として位置付けていた。このことは東アジアの世界においては、すでに前近代の王朝時代に高句麗史を朝鮮史のカテゴリーに入れていたことを物語る。こういう歴史的経緯からすれば、高句麗史の中国史への編入は説得力に欠けるものである。

5. 高句麗史をめぐる論争が提起した問題

高句麗史の帰属をめぐる韓国と中国の間の論争は、東アジアにおいては近代史の認識だけではなく、前近代史の認識の上でも民族と国家間に解決すべき課題が存在していることを克明に見せている。この論争を通して、高句麗史の性格を簡単には解釈できないことが分かり、韓国・朝鮮にありがちな単一民族史観の限界、中国で再び台頭する可能性のある中華的世界観の矛盾点も露呈された。

朝鮮と中国は陸地によって国境を接している隣国同士であり、古代から交流が盛んだったために、朝鮮と中国の関係史には相互の一国史だけでは割り切れない交差的部分が存在し、一国史観を脱皮し、より巨視的東アジア史観によって歴史を照明する必要もある。

しかし、中国で強まった高句麗＝中国史という主張はより開かれた東アジア史観の形成を目指すのではなく、却って伝統的な中華中心の世界観（中華思想）の表出であるといっても過言ではあるまい。

中国の高句麗史の研究史、そして辺境問題の研究者たちの中で、高句麗史の中国史への編入の動きが強まっているのは、高句麗の旧領土の多くが現在の中国内に存在し、高句麗民族の多くが中国内の民族に吸収されたという事実、韓国・朝鮮の学界が朝鮮の古代史の領域を中国東北地域にまで比定することへの反発、韓国・朝鮮が歴史的縁故権を根拠に中国東北地域へ領土的野心を持っているという判断からくる警戒感、現在の領土保全を重視する中国の多元民族一体論などの複合的な要因が挙げられる。

一方で看過できないのは、中国の開放化と経済成長により、中華の自信感が大きくなったことにより伝統的中華中心の世界観が中国の知識人たちの間で台頭していることである。高句麗を「中国高句麗」という名称と呼び、高句麗王朝の7百年にも及ぶ歴史をすべて中国の中央王朝との隷属・臣属関係に結び付けて時代区分をし、その独立性を認めようとししないのは、まさにこのような中華思想を表出であり、そのために自国の歴史と言いながらも高句麗の歴史を矮小化し、歪める結果にもなっている。

高句麗史の中国編入を主張するのは、韓国・朝鮮側への警戒感だけではなく、むしろ中華思想によるところが大きいと筆者が判断しているのは、中国と朝鮮が友好親善関係を保っていた50年代・60年代の段階に中国の歴史学界に朝鮮の歴史を矮小化する動きがあり、当時の周恩来総理がその動きを批判した事実からである²⁾。

2) 「周恩来同志談中朝関係」（「周恩来同志が中朝関係を語る」）『外事工作通報』1963年第10期

伝統的中華中心の世界観の台頭により、中国本位で歴史を解釈すればするほど、中国の歴史領域は広がるようになり、それが周辺の韓国・朝鮮ばかりではなく、モンゴル・ベトナム・トルコまでも巻き込む歴史論争ないし紛争を引き起こし、周辺諸国の中国に対する不信感と警戒感を増殖させる結果になる。近代に入り、伝統的な中華中心の天下観（中華思想）はかなり克服されたと思われたが、やはりこれは中国においては依然として克服すべき課題である。

高句麗史の帰属をめぐる韓国と中国の論争の過程で、実はモンゴルと中国との間でも「元史」の性格をめぐる論争が存在し、トルコと中国の間でも「突厥」の解釈をめぐる見解の違いが存在していることが浮き彫りになった。ベトナムと中国との間でも、歴史の解釈をめぐる波乱要素を潜んでいる。

韓国では、学者たちの間で、高句麗史＝中国史の主張が韓国史の多くの領域へと拡大されることに対する警戒心が出ている。高句麗が中国の少数民族の地方政権であるという主張には、中央政権による冊封という論理が提示されているが、この論理を拡大していけば、百済と新羅も隋と唐の地方政権ということになる。また、前近代の中国を中心とする東アジア世界の冊封と朝貢という関係についても、共通の認識が形成されているとは言い切れず、中華主義的解釈に傾けば、韓国と中国の学界で歴史論争が再燃する可能性が依然存在する。

中国が「東北プロジェクト」を通して高句麗史を中国史に編入するということが韓国に伝わると、多数の韓国人、特に歴史学者たちが一種の衝撃を感じた。例えば、高句麗史を中国史だと認めれば、自ずと古朝鮮史も中国史であると認めることになり、渤海に関しては朝鮮史との関連性を主張することもできなくなる。そうすると、韓国（朝鮮）の歴史は1千年も短縮され、朝鮮半島北部は朝鮮の古代史の領域から消えることになる。そのために中国の高句麗史＝中国史という主張に激しい反論・反発の声があがった。これは公には報道されていないが、北朝鮮でも同じことが言えるだろう。そのために、2003年の12月頃から韓国では高句麗史に関する国民的関心がさらに高まり、高句麗史に関する学術シンポジウム、・討論会・市民講座などが盛んに行われている。

一方、中国の高句麗史＝中国史という主張を契機に、韓国に根強く存在する単一民族史観を反省し、相互に交錯する歴史の部分を実東アジア史という巨視的視点から捉えるべきだという主張、韓国の民族主義を止揚し、東アジアにおいて歴史対話を積極的に行うべきだという主張もなされるようになった。

中国の学界にも、「東北プロジェクト」に対する韓国の激しい反発が伝わり、韓国・朝鮮の古朝鮮・高句麗・渤海に対する研究成果を積極的に受け入れ、学術討論の共催な

どを通して歴史認識の差異を埋めるべきだという意見も出ている。

今後は、開かれた歴史認識を持ち、合理的な研究成果を尊重し、学問的対話を重ね、東アジア地域社会が未来志向の共同体へと志向していけば、高句麗史の帰属問題はむしろそれぞれの一国史観を脱皮し、より巨視的な東アジア史の中で照明される可能性がある。

2004年7月に北朝鮮国内の高句麗遺跡と中国国内の高句麗遺跡がそれぞれ「世界文化遺産」に登録されたのも、中国の高句麗史中国史編入に利するという憂慮の声はあるものの、高句麗の文化と遺跡の保護・管理の面では望ましいことであり、高句麗に対する国際的関心を高める上でもよいことである。

Ⅲ. 中国と韓国の文化摩擦と嫌韓感情

1. 「江陵端午祭」の「世界無形文化遺産」登録に始まる文化摩擦

2005年11月に韓国の江原道地方の民俗祭である「江陵端午祭」がユネスコの「世界無形文化遺産」に登録された。韓国政府は、2000年に「江陵端午祭」をユネスコの「世界無形文化遺産」に登録する準備を開始し、2004年6月に「江陵国際観光民俗祭」を開催し、2005年6月に無形文化財保護に関する国際ワークショップを江陵で開催するなど、「江陵端午祭」の「世界無形文化遺産」登録のために環境作りを積極的に進めた。その結果、「宗廟儀礼及び祭礼音楽」「パンソリの詠唱」に次いで「江陵端午祭」が韓国で3番目の「世界無形文化遺産」に登録された。

韓国が「江陵端午祭」を「世界無形文化遺産」に登録する過程で、中国の民俗学者たちから端午節が中国起源の節句であるという理由から韓国の登録を反対する意見と中韓共同の文化遺産として登録すべきだという意見が出された。中国側の意見に対して、ユネスコは2004年5月に端午祭を両国共同で登録できるという立場を表明したと中国メディアは伝えている。

これに対して、韓国政府の文化財庁関係者はユネスコの無形文化財申請は国家別に行っていること、「江陵端午祭」と中国の端午祭は祭る対象と祭祀の内容が違うので、同じ無形文化祭として登録できないという見解を表明した（『東亜日報』電子版、2005年5月16日入力記事「韓中端午節文化遺産共同申請可能」）。結果としては韓国が単独で「江陵端午節」を「世界無形文化遺産」に登録した。そしてこの登録が中国側に韓国が中国の伝統文化を侵食するというイメージを植えつける決定的きっかけを作ってしまった。

た。高句麗史の中国編入に対する韓国側の反発と全く同じ性質のものではないが、それでも中国人の心理の中では、中国の伝統文化を韓国がある程度侵食しているという印象を受けていることは否定できない。「江陵端午祭」を直接見学した中国の学者たちは「江陵端午祭」の中国端午祭との違いをよく認識しているが、一般の中国人がそこまで認識しているとは限らない。

現在になってみると、「江陵端午祭」の「世界無形文化遺産」登録の過程で、韓国政府が中国政府と意思疎通をし、中国で「江陵文化祭」について積極的な説明を行っていたら、こういう誤解を解消できたはずだし、「江陵端午祭」を中国の端午祭と共同で「世界無形文化遺産」に登録できれば、むしろ中韓関係においてはよい結果を生んだ可能性がある。しかし、韓国による「江陵端午祭」の「世界無形文化遺産」への登録がその後の中韓文化摩擦と誤解の出発点になったと言っても過言ではあるまい。韓国の「江陵端午祭」の「世界文化遺産」登録以後、中国では伝統文化に対する保護意識を巻き起こり、中国政府は2007年に端午節と清明節を法定祝日に制定し、その代わり、5月のメーデーを祝日から外した。

2. 印刷術、天文測定器、東洋の伝統医学をめぐる宗主権論争

韓国では、慶州仏国寺の釈迦塔で1966年に発見された『無垢浄光大陀羅尼経』（8世紀初期から半ばの印刷物）を現存する世界最古の木版印刷物として見なしており、高麗時代に世界最初に金属活字印刷術が使用されたと見なしている。もちろん、韓国のこの主張が中国では学問的に反論がされている。しかし、印刷術に関する韓国のこの主張により中国が世界に誇る四大発明品を韓国が奪おうとしているという誤解がここ数年、中国のインターネット上で広まった。印刷術が中国の四大発明の一つであることが韓国で否定されているわけではなく、韓国の主張にはそれなりの論理的根拠がある。しかし、韓国の主張の論理的根拠が中国のインターネット上で詳細に紹介されているわけではなく、韓国が中国の印刷術を発明の成果を奪おうとするという感情的反発が先行されている感がある。

韓国では、2007年1月から新しい1万ウォン紙幣が発行されているが、新紙幣の前面に世宗大王、裏面に朝鮮王朝時代に使用された渾天時計がデザインとして使われている。しかし、中国で発明された渾天儀が韓国の紙幣にデザインになるのはおかしいし、これも韓国による中国文化の侵食として中国の一部のメディアに報道された。もちろん、渾天儀は中国の東漢時代に張衡により発明されたのであり、韓国の新しい1万ウォン紙幣

の裏面にデザインされたのは、1669年に朝鮮の技術者が自鳴鐘の原理を利用し制作した渾天時計であって、渾天儀を技術的に改良したものである。中国由来の発明品であるが、朝鮮で技術的に改良されたものであり、これが韓国の紙幣の裏面にデザインとして使用されているからといって中国の文化を侵食しているとは言えない。もちろん、相手の情報不足の状況では誤解を与える素地はある。一方、中国では渾天儀が韓国の紙幣にデザインとして使用されたことを中国文化の影響として歓迎する声も上がったという。

東洋の伝統医学をめぐるでも、中国と韓国の間で論争が起こった。2008年6月にWHO（世界保健機関）は鍼灸の経穴部位361ヶ所について国際基準を発表した。WHOは3年前から中国、韓国、日本の東洋医学の専門家たちの論議を経て鍼灸の経穴部位361ヶ所について国際基準を制定した。ところで、韓国の大韓医者協会はWHOが認定した361ヶ所の国際基準の中で357ヶ所が韓国の韓医学の経穴部位の基準を採用したものであり、韓医学の安全性、信頼度、互換性が国際的に評価された結果だと発表した。この発表について、中国漢方医学側が鍼灸の経穴部位355ヶ所が中国の基準を採用したものであり、韓国が根拠もなく事実を歪曲しており、中国に対する文化侵奪を行っているという反論を出した。その後、WHO側からも鍼灸の経穴部位の90%は中国の基準を採用したという説明がされた。これはどうやら韓国の大韓医者協会が韓国の漢方医学の水準を宣伝するために行った発表のようであり、結果として中国側の信頼を失ってしまった。韓国では、韓国で発展した漢方医学を「韓方医学」と呼称しているが、中国側からすればこれも韓国の無理な主張だと受け止める素地がある。

3. 高句麗・渤海関連ドラマに対する中国の反発

韓国では、中国による高句麗史編入の問題が発生してから、高句麗史、渤海史に対する国民的関心がにわかに高まり、それを背景に高句麗・渤海関連のドラマが立て続けて制作された。

韓国のMBC（文化放送）が2006年の5月から高句麗の始祖を主人公にした『朱蒙』を放映し、2007年9月からは高句麗の広開土王を主人公にした『太王四神記』を放映し、KBS（韓国放送公社）は2006年9月から渤海の始祖を主人公にした『大祚榮』を放映し、2008年9月から高句麗の第3代目の国王を主人公にした『風の国』を放映している。SBS（ソウル放送）でも2006年7月から高句麗末期の将軍『淵蓋蘇文』を放映した。

以上の高句麗・渤海関連ドラマは中国による高句麗史編入への反発もあって、ドラマの中で反中国、具体的には反漢・反隋・反唐の情緒が反映されており、韓国の時代劇が

歴史事実を忠実に再現しない傾向も相まって、中国でこれらの韓国ドラマに対する批判がメディアに現れた。

『重慶晩報』は2007年3月12日付けの記事に、SBSのドラマ『淵蓋蘇文』とKBSのドラマ『大祚榮』の中で、唐の太宗が高句麗を攻撃する過程で矢に打たれ失明したり、大刀に腹を刺される場面があるが、これは歴史事実の歪曲である批判した。中国の官営言論である『人民日報』の姉妹紙『環球時報』も同じ時期に韓国の3大放送局の高句麗関連ドラマが歴史の真実を考慮していないし、『朱蒙』には間違いが多いと批判した。

香港のインターネットメディアである『中国評論新聞網』の2007年3月13日付けの記事には、SBSのドラマ『淵蓋蘇文』の中の唐の太宗が高句麗の安市城を攻撃する過程で高句麗の楊万春将軍が放った矢により片目を失明する場面を見て中国人たちが憤怒していると報道した。高句麗の楊万春将軍が唐の太宗を矢により失明させたという記録は中国と朝鮮の正史にはなく、高麗時代以降の朝鮮側の詩文と野史に登場する。その真偽ははっきりしないが、韓国のドラマにこのような場面が事実として出現したことに中国では不満が出た。

中国の半官営通信の「中国通信社」の今年の11月25日付けの記事に、韓国のSBSのドラマ『淵蓋蘇文』の中の隋の陽帝が座っている背後の屏風に現代の中国の毛沢東の詩『雪』が書かれているとして、中国のネットユーザーたちが怒っているという報道があった。この記事は、さらに高句麗・渤海関連のドラマに矛盾点が多く、客観的事実に基づいていないと批判した。

最近、CCTV（中国中央テレビ局）で韓国のドラマを放送しすぎているという批判が中国で起こっているという報道もあり、韓国の高句麗・渤海関連ドラマの反中国情緒が中国内での反韓国ドラマの雰囲気醸成を醸し出している可能性がある。

4. 誤報と捏造記事による反発

2007年12月に中国の広州で発行される新聞『新快報』に「中韓文化戦争」という特集記事が収録され、そこでは韓国が漢字を「世界文化遺産」に登録しようとする伝え、ソウル大学のパク ジョンスという歴史学者が漢字は韓国人が発明したものであると主張したと伝えた。これは根拠のない誤報、または捏造記事であるが、この記事が同年の12月13日に香港の主要新聞『文匯報』にも引用され、同新聞は端午祭だけではなく、渤海、漢方医学、豆乳、風水地理説を韓国に奪われていると分析し、孔子、中国の越の美人西施、『本草綱目』の著者の明の李時珍が韓国出身だという出処不明の韓国側の主張

を紹介した。

2008年7月末から8月初めにかけて中国の南方地域と香港、台湾の一部メディアに韓国の『朝鮮日報』によると、孫文が韓国人出身であると韓国の成均館大学の朴 芬慶という教授が主張したという記事が流されたが、これは出処不明の捏造記事であった。しかし、この捏造記事が一時複数のメディアに連続引用されたことにより、インターネット上で反韓国感情が増幅された。

韓国には、在野学者の中に、韓国人の祖先である東夷族が漢字を発明した、孔子は東夷族であるという主張が聞かれたりするが、これはいずれも韓国学界の定説になっているわけではない。しかし、こういう主張が中国に伝わり、韓国人は中国文化を何でも韓国に宗主権があるという、いわゆる「中国文化韓国元祖論」として受け止められ、韓国が中国の伝統文化を侵食しているという警戒感を増幅させている。

5. 中国の嫌韓感情

現在、中国には一部の人々の中にいわゆる「嫌韓感情」といわれる反韓国感情が存在すると言われるが、このような感情は以上のような文化摩擦によって引き起こされる場合が多いが、その他にも複数の理由が考えられる。

それでは、中国の「嫌韓感情」として指摘される代表的事例を挙げてみたい。

2002年の韓日サッカーのワールドカップの際、韓国チームがイタリアに勝利した後、中国のメディアに韓国が誤判による不正な勝利をしたという報道が目立ち、中国にある種の「嫌韓感情」が存在することを伺わせた。

中国の国営通信社－新華社が発行する『国際先駆導報』の2007年12月10日付けの記事に、最近の4ヶ月間に中国人1万2千人を対象に調査した結果、「あまり好きではない国」として韓国を挙げた回答者が40.1%を占め、1位となり、日本が30.2%で2位になったという報道があった。

今年の1月に中国共産主義青年団の機関紙である『中国青年報』がYAHOOなどの中国の主要なポータルサイトと共同で2007年に中国で放映されたドラマの中で嫌いなドラマの調査を行ったが、1位が韓国の時代劇『大長琴』であったという。

以上の二つの調査結果が韓国に伝えられ、中国における「嫌韓感情」が深刻な水準にあるというふうに受け止められた。

2007年1月から2月にかけて中国長春市で開催された冬季アジア大会で韓国の女子スケート選手たちによる「白頭山は我が領土」というプラカードセレモニーに中国の観衆

と世論が反発した。

今年の4月にソウルでの北京オリンピックの聖火奉送過程で中国人留学生による集団騒動が発生し、韓国の世論の厳しい目に遭った。その直後、中国の四川省で起こった大地震に対して、韓国のネットユーザーの中から「天罰」云々の悪意的な書き込みが現れ、それが中国に伝わり、韓国に対する怒りを発生させた。

今年の7月に韓国のSBS（ソウル放送）が北京オリンピックのリハーサル場面を事前に流出し、中国で反発が起こった。

今年の8月の北京オリンピック期間中に、オリンピック競技場では、韓国の選手を揶揄し、韓国チームの中国との対戦以外の試合にも無条件に相手チームを応援する現象が起こったと韓国で報道された。

以上がいわゆる中国における「嫌韓感情」の近年の代表的事例であるが、これには中国の韓国の間の文化摩擦という性格以外にも、相互の偏見によるもの、スポーツ大会におけるライバル心理によるもの、中国での「韓流」ブームに対する逆流感情、潜在的領土問題に対する警戒心などの複数の要因が絡み合っていると言える。

Ⅳ. 中韓両国の歴史・文化摩擦に対する文明史的考察

韓国の国防研究院の関係者が今年の9月の初めに中国で北京の大学生100名と中国の韓国専門家12名を対象に行ったアンケート調査によれば、中国における「嫌韓感情」の誘発要因として、中国の国際社会における急速な成長に対する韓国の警戒心、中国の強い民族主義の意識、80年代以降の成長した中国の新世代の強い民族主義の情緒、「江陵端午祭」のユネスコ文化遺産への登録、韓国における中国商品への偏見、韓国ビジネスマンの傲慢で無責任な行動、韓国メディアの誇張的な偏向報道、韓国の中国漢字「世界無形文化遺産」申請説、韓国のアメリカ重視外交への拒否感などが上げられたという³⁾。

以上のアンケートの結果が中国における「嫌韓感情」の誘発要因を正確に捉えており、これには複数の要因が絡みあっているが、歴史・文化的要因によるところも大きい。他にも、中国内の「嫌韓感情」については、さまざまな要因が挙げられるが、筆者として注目したいのは、この問題の中韓間の歴史・文化摩擦としての性格である。

2000年代に入り、中国と韓国の間では、対立と摩擦が頻繁に発生し、これにはさまざ

3) このアンケートの調査結果については、2008年9月25日付けの韓国の「連合ニュース」の記事による。

まな要因が挙げられるが、韓国側においては中国による高句麗史編入に対する反発、中国側においては韓国の「江陵端午祭」の「世界無形文化遺産」登録に始まる韓国による中国文化侵食に対する警戒感と反発がその中心にあったと判断するからである。

中韓間の歴史・文化摩擦として捉えた場合、この問題はやはり文明史的視点からの考察が必要となる。

アメリカの政治学者サミュエル・P・ハンティントンが1999年に『文明の衝突』を著してから、現代の国際社会における異文化間の文明の衝突が注目されている。

中国と朝鮮は前近代の伝統社会においては、基本的に東アジアの漢字文明圏、儒教文明圏、または中国文明圏に属し、文明的性格において韓国の独自性が見えづらかった。歴史家トインビーが朝鮮、日本、ベトナムを中国の衛星文明として捉えたのもそのためである。近現代に入り、韓国・朝鮮は西欧文明の影響を強く受けており、前近代とは異なる文明的特徴を持つようになった。しかし、現代の韓国・朝鮮を文明論として捉える場合、その分類には曖昧性が存在する。ハンティントンは『文明の衝突』の中で、韓国・朝鮮を中華文明のカテゴリーに入れている。

現代の韓国・朝鮮においても、伝統文化を論じる場合、その文化の内容が中国の伝統文化と重複、類似する場合が多く、韓国・朝鮮が自国の文化として主張するものが中国でも自国文化として主張する場合と重なっている。端午祭がまさにその典型的な事例である。文明の同質性、または近似性によるものであり、そのために共通の文明意識を所有する面もあるが、お互いに相手の文化の異質性に対する理解が足りなかったり、全く異なる文明同士とは違う文明の衝突を引き起こす可能性もある。

朝鮮は前近代の歴史において、漢字、儒教、政治・社会制度など多数の領域にわたり中国の影響を受けており、そのために韓国・朝鮮の文化には中国文化との共通的要素が多いので、中国側からすれば、韓国・朝鮮文化の独自性を看過しやすくなる。韓国政府が「世界無形文化遺産」として登録した「江陵端午祭」が中国起源の端午祭の名称を使っているが、祭りの内容は中国との一致性を見出すのが難しいくらい、韓国在来の信仰と生活に根ざした民俗祭りに変容していることを中国では最初は十分に理解できなかった。

一方、韓国・朝鮮では、近代のナショナリズムとの関連から韓国・朝鮮文化の独自性に対する主張が多くなり、印刷術・天文測定器・東洋伝統医学の宗主権論争に見られるように、場合によっては韓国・朝鮮側が中国起源の文化を過剰に自国の独自文化として主張しているように中国側に受け止められたりする。韓国・朝鮮の文化が中国文化との共通性が多く、相互の文化の違いは顕著であるが、全く異質な文明圏に属していない

めに起きている現象でもある。

そのために、中国と韓国・朝鮮の間でも異文化理解に対する努力が必要であり、いわゆる「同種同文」的神話から脱皮し、お互いの文化の同質性と異質性について正確に理解する必要がある。

中国と韓国の歴史的関係についても考察が必要である。

前近代の中国と朝鮮の関係は基本的に中国を中心とする冊封と朝貢関係が特徴であった。近代に入り、日本の干渉下で朝鮮は中国との朝貢関係から離脱したが、日本による植民地支配下で自主的に中国との伝統的な関係を清算し、近代的国家関係として再定立する機会を逃した。戦後は中国と北朝鮮は長い間、社会主義同盟国として友好関係を維持しているが、両国間に歴史に対する共通の認識が形成されているとは言い難い。中国と韓国が国交を樹立してから、両国間に初めて近代的な外交関係が形成し、その関係が発展するにつれて、両国間の歴史と文化に対する共通認識の欠如による摩擦が生じるようになった。

高句麗史の中国史への編入の動きは、中国には前近代の遺産である中華思想が依然存在し、そのために中国が歴史的に関係の密接だった周辺国の歴史を軽視したり、あるいはその主体性を否定し、中国の歴史のカテゴリーに組み入れる可能性すらあることを端的に見せつけた。

一方、韓国と朝鮮側にも過剰な民族主義的歴史観、単一民族史観が存在するのも事実である。韓国と朝鮮の両方において高句麗の歴史の中国との独立性、または対立性を強調し、高句麗が中国の歴代王朝と密接に交流していた事実を軽視するのも問題である。

中国と韓国・朝鮮の間の歴史認識の相違を克服するためには、両方とも自国本位の歴史観から脱皮し、相手の歴史について理解し、尊重する必要がある、究極的には国家・民族中心の歴史観を止揚し、両者が共有可能な東アジア共通の歴史観を形成する必要がある。これは東アジアの他の国同士の歴史関係についても言えることである。

主な参考文献・サイト

- 申亨植著『高句麗史』、梨花女子大学校出版部、2003。
- 盧泰敦著『高句麗史研究』、四季節出版社、1999年。
- 耿鉄華編著『中国高句麗史』、吉林人民出版社、2004。
- 馬大正等著『古代中国高句麗歴史叢論』、中国社会科学出版社、2001。
- 馬大正等著『古代中国高句麗歴史統論』、中国社会科学出版社、2003。

- 李徳山等著『中国東北古民族発展史』、中国社会科学出版社、2003。
- 『月刊中央』（韓国 の月刊誌）2003年12月号・2004年1月号・2月号・3月号・4月号の特別付録（「韓中高句麗史論争」特集）。
- 韓国 の主要新聞 の電子版 における2003年～2008年間 の高句麗 関連記事、韓国 と中国 の間の文化摩擦・中国 の嫌韓感情 に関する記事。